親の教育関与が子の教育達成に及ぼす影響
― 3 世代調査を用いた分析 ―

吉田　崇（静岡大学）

1　問題の所在

教育達成や学校成績は出身階層に大きく影響されることが知られている。一方で、親の階層により子育て（parenting）のスタイルに差があることも知られている。本田（2008）は、母子ペアデータを用い、子育てのタイプと子の地位達成について分析している。本報告では、父親にも関心を広げ、階層変数を統制した上でも親の子育てへの関わり方が子の教育達成に影響を及ぼすのか、について親子ダイアド・データを用いて検証する。

2　使用するデータ

分析には「親子関係についての人生振り返り調査」（以下、3 世代調査と呼ぶ）を用いる。本調査は、全国の 60-69 歳（1950～59 年生まれ）の男女とその配偶者を対象として 2019-20 年に実施された。有効回収数は本人票 1,718、配偶者票 1,084（回収率 38%）で、本人と配偶者の両方を回収できたのは 1,084 票（本人票回収に対して 63%）であった。分析にはこの 1,084 ケース（夫婦）を使用する。調査の詳細は石田（2000）参照。

調査は調査対象者本人、親、子の 3 世代にわたる詳細な情報を有している。以下では、対象者の子を子、対象者のことを（子から見た）父/母（または親）と呼ぶ。子は最大 3 人の情報があり、それぞれの子について小学校時代の（親の）教育関与、最終学歴、初職、婚姻、そして生活水準といった項目を尋ねている。教育関与は (a) 勉強をみてあげること、(b) 一緒に遊んだり、運動したりすること、(c) 美術館・博物館・図書館などに連れて行くこと、の頻度を子ごとに尋ねており、本人票・配偶者票を用いて父母の教育関与を把握する。

3　分析

子の平均年齢は 35.6 歳（S.D.＝5.8）で、32-40 歳（1979～87 年生）が半数を占めている。この世代の小学校時代は 1980 年代後半から 90 年代末、大学等進学時期は 1990 年代末から 2000 年代前半に相当する。学校基本調査によれば、この世代の進学率は、男子四大 47%、女子四大 32%、女子短大 17%である（9 年間の単純平均）。

従属変数である教育達成を（1）中学 3 時成績（1：下の方～5：上の方）と（2）最終学歴、に分けて考える。それぞれの級内相関係数 ICC をみると、0.275、0.432 といずれも大きな値を示しており家族内（きょうだい）での類似性が高い。独立変数の教育関与（a）～（c）の ICC も、父母の双方でいずれも 0.7 以上と極めて高い。以上を踏まえ、親の教育関与と教育達成の関連をマルチレベル回帰分析によって検討した。

4　結果と考察

（1）中 3 時成績は、階層変数を統制した上でも母（b）、（c）および父（c）の係数が有意であった。（2）学歴（教育年数）は、階層および学校外教育経験を統制すると母（c）の係数のみ有意であったが、中 3 時成績を加えると有意ではなくなった。これらの結果から、幼少期の親の教育へのコミットメントは子の教育達成に部分的な影響をもちうるが、階層変数と比べると影響が小さいことが分かった。以上の基本的な変数の検討から、教育達成を通じた階層再生産において、出身階層の影響が強固であることが改めて確認された。

文献

本田由紀，2008,『「家庭教育」の隘路：子育てに強迫される母親たち』勁草書房.
石田浩，2020,「「親子関係についての人生振り返り調査」からみた親子関係の世代間連鎖」東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ No.127.

謝辞　本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・特別推進研究（18H05204）の助成を受けたものである。
（キーワード：教育関与、教育達成、ダイアド・データ）